

のは新澤池である。この部分循環湖の深層は海水であり、その循環速度は30年に一度という結果が得られた。この湖はまだ未知な点が多く、今後も調査をする予定である。測深図の作成から手掛けた三宅島の水の調査は、今後も継続テーマとなることであろう。

北の方では、利尻・礼文島の湖も見に行った。礼文島の久種湖は日本最北の湖で、荒涼とした風景のなかにあった。利尻・礼文島の湖はいずれも腐植栄養湖で、酸性湖であった。

南の方では1974年と76年に日本最南の湖沼群である南・北大東島の湖沼を調査した。大東島は隆起サンゴ礁で、その中央部のかつてのラグーンであった部分に多くの湖沼がある。その数は南大東島で約80、北大東島で約20である。これらの多くはドリネが水没した形を持ち、極めて特異な湖となっている。大東島は冬でも気温が15℃位であり、いわば冬のない亜熱帯の気候である。こゝでは12月に蛙が鳴き、花が咲いている。温度が高いため生産が多く、こゝでもまた腐植栄養湖になっている。水の色は茶色で、それは東北・北海道の沼のものと同じであった。澄んだ沼や池は、温帯のせまい地域のものであるように思われる。

1976年には奄美諸島の調査を行なった。奄美や沖縄の水汲みの労働については、柳田国男の著書にくわしくのべられているが、水道が普及した現在、かつての苦勞を見ることはできない。電気・水道の普及が、伝説的に私たちが理解していた島の生活を大きく変えてしまっていた。沖永良部島や喜界島では農業の機械化、耕地の改良が進められており、日本全体としてみても先進的な農業地帯となっているように思われた。これらの島々で興味をひかれたのは、うすい石灰岩層の下から流出する湧水には神がまつられ、かつては村の中心であったように見受けられたが、現在では立寄る人は少ない。

離島の水のあり方は、一つ一つの島でそれぞれ異っている。また、水と生活のかゝりあいの仕方にも各島でそれぞれ異っている。島の水問題は、陸水学や水文学のみならず、人文現象にも密接にかゝり合う興味ある研究テーマであるように思われる。

アナウンサー稼業 25年

後藤 美代子

早いもので(というのは些か陳腐な決り文句ですが)卒業し就職して24年、この春から25年目に突入します。10年までは「何の仕事でも10年やってやっと1人前と言われる。10年までは是非やりたい」という目標がありました。でも、10年やったからといって、もうこれでいいという境地に達する筈もなく、もう少し、もう少しと続けてきた結果が現在のものです。

昨年、私が就職した年に生まれたお嬢さん達が入って来ました。それまでにも10才下、15才下、20才下という人達がいたわけですが「あの年に生まれた赤ちゃんが……」と思うと、特別な感慨がありました。

女性の大学進学率が高くなり、卒業後は何か仕事をしたい、職業をもちたいという人が多い現在と違って、まだ「就職」がそれ程歓迎されない時代でした。縁談があり、先方のお父さんが「アナウン

サー風情の女…」と言ったとか言わないとかで憤慨したもの、今となつては微笑ましい思い出です。就職してから今まで、何の迷いもなく働らき続けてきたと思われるかもしれませんが、私なりに可成の山坂は越えてきたつもりです。何しろ、そこは江戸ッ子(東京ッ子?)意地っぱりと負けん気でもっているような私ですから、その度に「なにを!」という具合に、逆にがんばってしまうのです。

結婚の段階では、やめる気はありませんでした。つれあいとなる人も反対はしなかったし、先輩に既婚で母親という人もいましたし、共稼ぎは出来そうだと考えたからです。しかし、出産の時はそうはいきませんでした。周囲は、母親になればやめるものと、ほぼ確信していましたから。当人はといえれば、7年で丁度仕事が面白くなった段階で、やめるなどと考えられなくなっていました。一騒動ありそうな所、丁度よく(?)主人が留学生試験に受かって外国に行くことになり、うやむやのまゝ続けてよいことになってしまったのです。

子供も二人になると、まあ寛大だった主人の態度も微妙に変わりました。「子供の為に……可哀いそうだと思うのか」と言われるまでもなく私も迷いました。アナウンサーの仕事は、表面のある部分は華やかですが、NHKの職員なので、地味な、つまらないと思われるような仕事も沢山あります。1日中狭いスタジオの中で、番組の粹アナウンスをしたり、海外向けのニュースを讀んでいたりという日が続くこともあります。仕事がお医者様だったり、学校の先生だったら、多少の犠牲を払って働いていても、社会の役に立っているのだ、人の為になっているのだと思うことが出来るでしょう。でも私の場合は違います。がんばって仕事を続けているが、これでよいのだろうか。子供の、彼等にとっては二度とない時期を、家庭で暖く見守ってやるべきではないのか。家族に犠牲を払わせて働いているのは、私の我がままではないのか。真剣に考えた時期でもありました。

何時のまにか、女性アナウンサーの最古参で東お役をしなければならなくなり、女性故に昇進が遅いと言われながら管理職となってからは、また違った悩みも生まれました。そして、現在は仕事の先行きも含めて、平均余命の30年程をどう生きるか。中学生の娘に先輩として、どういう生き方をすればよいとアドバイス出来るのか、考えこんでしまっているところなのです。(1回生)

(女性と職業についてなら、表向きはもっと偉そうに勇ましいことも書けるのですが、気取っても仕方ないので、これは本音です。)

尾瀬と生徒

前沢光子

7月下旬、Nさん(41年卒)の引率するハイキングクラブと一緒に尾瀬を歩いてきた。大清一三平峠一尾瀬沼一尾瀬原一鳩待峠の一般向きのコースをとった。

三平越えの道はブナやミズナラの緑こい気分のよい道であったが、数年前建設されかけた車道が、所々にその醜い姿をさらけ出している。さいわい反対運動で工事は中止された。また再開されぬとよいかなどと思いながら歩く。生徒はベチャクチャよくしゃべる。時々、「早い」「少し休んで」「疲れ